



Humanity & Nature Newsletter

No.35
February 2012

地球研ニュース



雲南省、元陽への道でみたモモ売り。棚田で有名な元陽へは昆明から車で7時間あまりの長いドライブだ。途中でも小規模の棚田や段々畑が見られる。彝(い)族在住の地域でモモ売りの露店があった。幼い姉妹が店番をしていたのが印象的(撮影:湯本貴和)

今号の 内容

P2

特集1●国際シンポジウムの検証
崩壊の真相を探り、
未来社会への地平を開く
阿部健一+石本雄大+安部 彰
遠藤 仁+渡邊三津子

P4

特集2●プロジェクトリーダーに迫る!
地域レベルの水管理に資する
統合知の構築を
渡邊紹裕×伊藤千尋

P6

特集3●プロジェクトリーダーに迫る!
中国の環境問題を
地球の問題として考える
窪田順平×楨林啓介

P8

■ 地球研こらむ
地球研の社会交流
—地球環境学と社会のラポールを築くために
神松幸弘

P9

■ 百聞一見—フィールドからの体験レポート
つながりに支えられてフィールドワークする
ザンビアでの社会ネットワーク調査から
伊藤千尋

P10

特集4●研究プロジェクト発表会を終えて
参加者のレポートと総括
渡邊紹裕
檜山哲哉 + 白岩孝行 +
陀安一郎 + 細谷 葵

P12

■ 前略 地球研殿—関係者からの応援メッセージ
連携プロジェクト再考
白岩孝行

P13

■ 所員紹介—私の考える地球環境問題と未来
ブーゲンヴィルの危機言語
言語多様性と地球環境問題
大西正幸

P14

■ お知らせ

崩壊の真相を探り、未来社会への地平を開く

出席 ● 阿部健一(地球研教授) + 石本雄大(地球研プロジェクト研究員) + 安部 彰(地球研プロジェクト研究員) + 遠藤 仁(地球研プロジェクト研究員) + 渡邊三津子(地球研プロジェクト研究員)

編集 ● 阿部健一

毎年、当該年度に終了するプロジェクトの成果を国際的な学術コミュニティに問う「地球研国際シンポジウム」。今年度はBeyond Collapseをテーマに、四つのプロジェクトがそれぞれセッションを担当して、3日間にわたって開催した。各セッションの目的は十分に果たすことができたか。今後を引き継ぐべきことはなにか。各プロジェクトを代表して、企画と運営の中心となった4人のプロジェクト研究員に話をうかがった。

阿部 ● まず、各セッションの概要と狙いをお聞きしましょう。川端プロジェクトの安部さんからお願いします。

感染症をめぐる 多様な相関関係を解きほぐす

阿部 ● セッション1の目的は、地球環境問題としての感染症が、いかなる病原生物・宿主・人間の相互作用連環において生じているのかを知り、壊滅的な感染症の発生・拡大を未然に防ぐ手立てを構想することで、未来可能性へのひとつの展望を示すことにありました。

阿部 ● プロジェクトの目的がそのままセッションの課題ですね。具体的には？
安部 ● 議論のフォーカスを、鳥瞰(大情況)からいわば虫瞰(具体実証)へと絞りこむ流れで構成しました。

まず、グローバルな感染症問題と社会経済問題との連環についての包括的な報告のあと、世界的にも研究が滞りつづいたばかりの生物多様性と感染症との関係についての報告がありました。

つづいて、プロジェクトを代表してサ

Beyond Collapse: Transformation of human-environmental relationships, past, present and future

● 内容および担当プロジェクト

session 1 New ecologies of disease: Observing and theorizing human-pathogen interactions
研究プロジェクト「病原生物と人間の相互作用環」(プロジェクトリーダー・川端善一郎)

session 2 Beyond collapse: The case of Indus Civilization
研究プロジェクト「環境変化とインダス文明」(プロジェクトリーダー・長田俊樹)

session 3 Transformation of human society and environment in Central Eurasia
研究プロジェクト「民族/国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明
— 中央ユーラシア半乾燥域の変遷」(プロジェクトリーダー・窪田順平)

session 4 Building resilient communities in the semi-arid tropics
研究プロジェクト「社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス」(プロジェクトリーダー・梅津千恵子)

session 5 Synthesis

● 開催概要 2011年10月26日(水)~28日(金) (地球研 講演室)

使用言語: 英語 参加者: のべ約 250 名

ブリーダーの源利文(地球研プロジェクト上級研究員)さんが、日本におけるコイヘルペスウイルス感染症について報告しました。人為による環境改変と感染症との関係の一端が明らかとなっただけでなく、環境・生命倫理における新たな視点と問題の地平が開かれたと思います。

最後に、プロジェクトの海外共同研究者から、ケニアの住血吸虫症について報告していただきました。

「文明の崩壊」ではなく、 「文明の変容」と理解すべき

遠藤 ● セッション2は、「環境変化とインダス文明」プロジェクトの成果を中心に議論しました。従来いわれてきたような「インダス文明の崩壊」は起こっておらず、実際は環境の変化にあわせて農耕が容易な地域に移動して人間集団の規模を縮小させるなど、居住システムを緩やかに変化させただけであることを明示できたと思います。

そもそも人間集団に「崩壊」は起こりえず、集団が劣化したように見えても、なんらかのかたちで適応している。インダス文明は、降雨量の季節的変化というイベントに人間が柔軟に対応した事例だということです。かといって、この事例を現代社会にそのまま適応できるわけではない。この点は、留意しなければならないと思います。

阿部 ● 「崩壊」ではなく「変容 (Trans-

formation)」であったのですね。

シンポジウム全体からは、どのようなところに得るものがありましたか。

遠藤 ● 私の専門もプロジェクトも、古代社会を射程にしていますが、ほかの多くのプロジェクトは近現代を射程としている。ですから、ふだんの研究活動では接することのない話題や研究の方向性を知ることができました。「崩壊」の原因や時間軸・空間は異なるものの、危機的なイベントに対して人間がとる行動の多様性を学ぶことができました。

渡邊 ● セッション3でも、結果として人間社会の「変容」と「崩壊」をあつかうことになりましたね。

環境問題の根幹にあるのは 人の暮らしと社会

渡邊 ● 私たちのプロジェクトは2,000年あるいはそれ以上のスパンをあつかっていますが、今回はとくに20世紀から現在という短い時間に焦点を当てました。

具体的には、まず中央ユーラシアの自然環境とそこで育まれた生態適応的生業について概観しました。そのうえでソ連という国家がどのような理念を掲げて自然を改造し、農業生産の拡大を試みたか、その結果として人びとの生業や資源利用のありかた、暮らしを取り巻く生態環境がどのように変化したかを議論しました。阿部 ● ほかのセッションと印象が違いましたね。



地球研エントランス前にて、シンポジウムの参加者たち



あべ・あきら
専門は社会学・倫理学。研究プロジェクト「病原生物と人間の相互作用環境」プロジェクト研究員。二〇一〇年から地球研に在籍。



えんどう・だいし
専門は考古学。研究プロジェクト「環境変化とインダストリアル文明」プロジェクト研究員。二〇〇九年から地球研に在籍。



わたなべ・みつこ
専門は地理学。研究プロジェクト「民族/国家の交通と産業変化を軸とした環境史の解明」中央ユーラシア半乾燥域の変遷」プロジェクト研究員。二〇〇五年から地球研に在籍。



いしもと・ゆうた
専門は生態人類学。研究プロジェクト「社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス」プロジェクト研究員。二〇〇八年から地球研に在籍。



あべ・けんいち
専門は環境人類学、相関地域研究。研究推進戦略センター成果公開・広報部門長。二〇〇八年から地球研に在籍。

渡邊●環境問題は、問題が顕在化している場所や、その問題の解決方法に焦点が当たることが多いですね。しかし、現実の環境問題は、一人ひとりの生活や社会の変化とともにあるものです。問題に至る道のりで人びとがなにを考えたのかを理解しなければ、問題解決の真の緒は見つからないでしょう。そのような意味では、歴史的に培われた生業の変容や政治、人間社会、民族集団の変容などを取りあげて問題の本質を模索したのはチャレンジングだったと思います。

「変容」で開く未来社会設計の可能性

石本●「半乾燥熱帯におけるレジリエントなコミュニティの構築」というテーマでのセッションでした。レジリエンスに関して、人間社会と「崩壊」、「変容」を関連づけて議論できる研究者は多くありません。

ですが、リーダーの梅津千恵子さんをはじめとする4人の講演者はそこを充分議論し、未来に向けてのシステムの再編成に関する議論を深めることで、実りあるセッションとなりました。

今回のシンポジウムを通して再認識したことの一つが、時間・空間でのスケール設定の大切さです。研究テーマが多岐にわたるプロジェクトが集まってシンポジウムを構成したことで、さまざまな研究手法の可能性や限界を実感しました。そういうなかで至極とうぜんではあるのですが、各研究手法のポテンシャルを活かすには、それぞれに適した時間・空間スケールの設定をする必要がある。そのことを、あらためて強く意識しました。

阿部●「崩壊」がテーマのシンポジウムでしたが、「変容」というキーワードが透けて見えました。レジリエンスのなかでも、

Transformabilityは重要な概念です。阿部●地球研としては、「崩壊とは変容である」という認識とその意義をもっと強調したほうが論争的で、議論もさらに深まったのではないかと思います。

「想定外を見とおす想像力」を身につけたい

渡邊●「なにを問題と捉えるか」で、海外からの参加者と地球研の参加者には溝がありました。事前勉強会で、たしか川端さんが、「現在の人間社会は、いまだかつて

経験したことのない、あるいは想像のつかない崩壊の危機に直面している」とおっしゃっていました。しかし、この危機意識を最後まで共有できなかった。

昨年東日本大震災とそれに続く原発事故を受けて「想定外」という言葉が大きく取沙汰されました。しかし、ほんとうに問題

なのは「想定外を想定しようとしなかったこと」だと思うのです。私たちは「想定外を見とおす想像力」を身につけることが必要ですね。

阿部●国際シンポジウムは、海外の研究者にわれわれの研究成果とアイデアを発信する絶好の機会です。それには、もっと地の利を生かしたほうがよい。自戒もこめて、総じて地球研関係者のプレゼンスが低かったように思う。ホームとしての個性を惜しみなく前面に出すべきです。そのためにも、このシンポジウムは地球研「全体」の祭りであるという認識が浸透することを期待します。

研究員の積極的な参画が新たな切り口を生む

遠藤●今回は研究テーマの関連性が薄い四つのプロジェクトによる共同開催で、

個別のセッションはたいへん興味深く聞けたが、セッション間のギャップが大きく、総合討論にまとまりが欠けてしまった気がします。

言いわけかもしれませんが、プロジェクト終了年度は忙しいですからね。今後は、終了年度前にこのようなイベントを担当するよう考慮してはどうでしょうか。

渡邊●地球研がなにを問題と捉えているかをわかりやすく発信するには、事前準備やシンポジウム進行上の工夫が必要かなと。せつかく、これまででない視点で環境問題を扱おうとしているのですから、地球研の意見をもっと主張できるかたちをつくるべきですね。

また、かぎられた時間内に、できるだけ多くを発信するためには、ポスターセッションを取り入れるのもよいかもありません。所内のメンバーだけでなく、プロジェクトメンバーからも広く募れば、プロジェクト研究の中身をより詳細に見せることができる。若手にとっても、それぞれの研究を海外の研究者に知ってもらうよい機会にもなりますからね。

石本●各プロジェクトが相互乗り入れするセッションも必要だと思います。テーマ設定などをする、発表準備の早い段階で、プロジェクト間での相互理解が必要ですが、十分な用意ができれば各プロジェクトの研究の核心に踏み込んだ議論ができるのではないかと考えます。

遠藤さんも指摘したように、テーマ設定を工夫することで最終年度以外のプロジェクトの参加を検討してはいかがでしょうか。議論は引き継がれ、翌年度以降の研究成果に反映されるはずですよ。

阿部●今回は、企画・運営にプロジェクト研究員が本格的にかかわった最初のケースでした。改善点となるとみなさん、いろいろ思うところはあるようです。貴重な意見を共有し、次につなげたいと思います。どうもありがとうございました。

2011年12月26日 地球研「セミナー室」にて



地域レベルの水管理に資する統合知の構築を

研究プロジェクト「統合的水資源管理のための『水土の知』を設える」

話し手●**渡邊紹裕**(地球研教授)×聞き手●**伊藤千尋**(地球研プロジェクト研究推進支援員)

編集●伊藤千尋

総合地球環境学の構築という目標実現に向けて、第II期に新しく「基幹研究プロジェクト」がもうけられた。その第1号として2011年に船出したのが「統合的水資源管理のための『水土の知』を設える」。「設計科学」、「未来可能性」というキーワードが所内で飛び交うなかで、なにを見据えているのか。人と水との関係を考えてきたプロジェクトリーダーの渡邊紹裕教授が、身近な水と地球の将来を展望する。



インドネシア、南スラウェシでの3次用水路と地元の管理責任者

伊藤●プロジェクトのキーワードは「統合的水資源管理」ですね。

渡邊●水資源管理は、世界各地で大きな問題として認識されな

がら、なかなか改善が進まない現状です。水にかかわるさまざまな分野、あらゆる立場の人が納得・合意できる管理のしかたを編み出さないといけないからです。水を使う局面だけでなく、流域レベルなど関連する範囲全体で考えなければならぬ。かかわるアクターと空間の全体で、統合的に考えることが求められているのです。

複雑な水資源管理を統合して考える

渡邊●水利用だけでなく、治水や生態系、景観など、水にかかわるすべての問題を統合的に扱うこととなりますが、最近では地球規模での水循環の変化への対応も求められています。

伊藤●広い意味での統合ですね。

渡邊●1990年代初めに国連が統合的水資源管理をうち出して以降、概念は合意されても、実践できていないのです。

統合的水資源管理には「法的な枠組み」、「ガバナンス」、「管理手法」という三つの柱があります。このプロジェクトでは、とくに三つめの「管理手法(インスツルメンツ)」を重要な課題としています。

制度的枠組みや合意形成のしくみができたととしても、具体的な施設の配置と機能、その管理実践がどんな結果を生むかの情報がなければ動かない。それを考える材料を提供することが重要です。

価値ある情報をフィールドで求める

伊藤●これだけ多くの領域を含んでいると、材料とその評価のしかたも問題でしょうね。このプロジェクトでは、「環境、経済、社会、文化」の四つの視点から評価すると聞きました。具体的には、どのような手法で行なうのですか。

渡邊●定量化して評価指標を作成することを考えています。ただ、これまでの経験から、研究者がつくった指標をそのまま現地の関係者などに提案しても通用しない。このプロジェクトでは、絵に描いた餅で終わらないよう、指標をつくる段階から使う人にも加わってもらう。

伊藤●さまざまなステークホルダーがいいますから、評価の重みづけをどう考えるかも問題ですね。

渡邊●どこに重きを置くかは、アクターやスケールの範囲、地域の条件や歴史・文

化によっても異なるはずですから、それを考慮した指標にするつもりです。

先の四つの視点のうち、現実には経済的評価を優先せざるをえないが、環境と経済から最適な値や選択が出てくるとは思えない。しくみを明らかにしたうえで、たんなる「情報」、informationではなく、「こうしたら、こうなりますよ」という付加価値をつけた「知識」、knowledgeとして現地に渡すことが重要だと考えています。

伊藤●対象とする地域のスケールはどのように設定されているのでしょうか。

渡邊●プロジェクトでは、人間がじつさに水を使う範囲を「ローカル」とよび、統合的水資源管理の基本的ユニットとして捉えています。そのローカル、しかも圧倒的にたくさん水を利用しているのが農業。地球研のほかのプロジェクトも、農業・農村の水利用に起因する環境問題の解決の必要性を指摘してきました。私たちも、とくに地域の生業である農業での共同的な水利用に注目しています。

基幹研究プロジェクトとしてアウトカムをより重視する

伊藤●水に関連する地球研のこれまでのプロジェクトと、今回の基幹研究プロジェクトとではなにが大きく違いますか。

渡邊●二つあります。一つは、これまでの



インドネシア、バリ島の伝統的灌漑組織であるスバクの取水堰



プロジェクトが事例研究を行なうおもな地域

プロジェクトが見出した課題や蓄積してきた手法・データを踏まえ、それを統合するかたちでプロジェクトの目標と方法を組み立て、実施することです。

農業や農村の水利用が世界の水にかかわる環境問題の主な要因の一つであることは、これまでのプロジェクトの成果として示されてきました。その内容は2009年の東京でのシンポジウム*1や人間文化研究機構の連携研究「人と水」*2などでも繰り返し考察されてきました。

このプロジェクトでは、そこから一歩進んで、そういう考察のなかから本質的な問題を抽出し、その改善・解決の方向に取り組むべきだと考えています。

伊藤●プロジェクトの立て方と構造が、これまでとは異なるのですね。

渡邊●もう一つは、具体的な目標です。地球研の第Ⅱ期の課題である設計科学的アプローチに従って、よりよい水資源管理にはなにが大切なのかを具体的に示すことをめざしています。簡単にいえば、「この考え方や方法を取り入れたら、よりよい水資源管理ができるはず」という基本的な枠組みをうち出して、各地域の関係者に伝えることでしょか。

そうしたうえで、国際機関や JICA などドナー側のガイドに組み入れることなどをプロジェクトの5年間で実現させようと思っています。

伊藤●アウトプットにより重点を置くことになるのですね。

渡邊●実践に繋がるアウトカムですね。とくに大事にしたいのは、「みんながうまく管理することが、環境にも生産にもよいことなのか」という問いです。

というのは、農業の水利用にしても、世界の多くの地域で農家が共同で管理してきました。水管理の範囲は、だいたい数千から1万 ha、歩いてまわれる面積で

いとう・ちひろ
専門はアフリカ地域研究、人文地理学。研究プロジェクト「社会生態システム」の脆弱性とレジリエンス・プロジェクト研究推進支援員。二〇一一年から地球研に在籍。



わたなべ・つぎひろ
専門は農業土木学。研究プロジェクト「統合的水資源管理のための『水土の知』を設える」プロジェクトリーダー。二〇〇一年から地球研に在籍。



す。地域の人たちが、その土地と水、人びとの関係を把握できる範囲です。そのように、人の顔が見え、施設や地域に愛着があるからこそ、よい水管理ができる。しかも、環境にもよいのではないかと、提案・再確認したいのです。

つなぎの効果は効率だけでははかれない

渡邊●経済的に合理的で、送配水もロスの少ないシステムは、局面としては効率的な管理ができていくということでしょう。しかし、水施設や資源としての水、地域の水循環を大切にしようという気持ちが、地域の人たちの心に長期的に根づくのでしょうか。効率的であることは基本ですが、よい水資源管理には、「人とのつながり」も重要な要素です。

伊藤●東日本大震災後の日本では、人とのつながりが見直されていますね。

渡邊●ウェルビーイングとしての人とのつながり。これは、これからの社会には欠かせない要素だと思います。いい水管理をするだけでなく、水管理をとおしての人とのつながりが、生きるうえで大事なのではないかな。人やものとのつながりに加わる喜びは、未来可能性の大事な要素ではないでしょうか。

グローバルな変容を見据える

伊藤●私が研究をしているアフリカでは、狩猟採集民に代表される伝統的な資源利用をしてきた人たちの生業システムが、グローバル化によって変容しています。現代社会では、ある資源利用が環境にとって持続的であることは、地域の「資源」と「人」だけの問題でなく、広義の社会システムの一部として位置づけられるべきだと思います。

水資源管理に関しても同様のことは見られますか。

渡邊●それはプロジェクトの調査対象地の選択とかかわっていますね。たとえば、

プロジェクトの調査地であるトルコ南東部では、日本の現在の水稻の作付面積とほぼ同じ180万 haの灌漑農地開発事業が進められています。数千年の農業の歴史があるこの地域でも、これほど大規模な灌漑の経験はありません。遊牧や天水農業を営んできた人たちが、農業生産がヨーロッパを中心とする国際市場に支配されつつあるなかで、用水の利用や管理をどうするべきか模索しています。

同じような現象が灌漑の理想郷といわれてきたインドネシア、バリ島でも起こっています。ここには「スバック」という水利組織があり、水管理はヒンドゥー教にもとづいた社会システムと密接にかかわって機能していました。しかし、農業生産のグローバル化やツーリズムの拡大によって、農地の減少や土地利用に変化が生じています。

そのような調査地で地域の人たちとともに、農業を介しての世界市場との関係、グローバル化との関係を考えながら水資源管理を考える。そのようにして、プロジェクトを進めます。

水と人間の将来を展望する

伊藤●最後にリーダーとしての意気込みをお聞かせください。

渡邊●「人間が環境をどこまで改変してよいか」という世界的な関心と水研究とを結びつけながら取り組みたい。これまで灌漑を専門にしてきた私ですが、人間社会の未来を考えたときに、私たちはどれだけ水循環をいじってよいかという自身への問いかけもあるのです。このことを、プロジェクトを通して整理したいと思っています。

プロジェクトの研究課題である、水資源管理における「みんなが協力して悦びとともに作りあげるしくみ」は、プロジェクトの進め方にも取り入れたいですね。伊藤●水研究の集大成ですね。貴重なお話、ありがとうございました。

2011年10月14日 地球研「プロジェクト研究室」にて

*1 第1回地球研東京セミナー「人・水・地球——未来への提言」2009年10月9日 霞山会館(東京都千代田区)
*2 人間文化研究機構連携研究「潤潤アジアにおける『人と水』の統合的研究」(研究代表: 秋道智彌地球研教授)

中国の環境問題を地球の問題として考える

中国環境問題研究拠点

話し手●窪田順平(地球研准教授)×聞き手●榎林啓介(地球研プロジェクト上級研究員)

編集●榎林啓介

人間文化研究機構が実施する「現代中国地域研究推進事業」は、早稲田大学、慶應義塾大学、東京大学、京都大学、東洋文庫、地球研の六つの拠点を構成されるネットワーク型拠点形成プロジェクトだ。地球研に設置された「中国環境問題研究拠点」は発足から5年、2012年度からは第Ⅱ期を迎える。拠点リーダーに就任して3年になる窪田順平准教授に、拠点の活動のこれまでのねらいと到達点、今後の課題をうかがった。

榎林●拠点の英語名は RIHN Initiative for Chinese Environmental Issues ですね。偶然にも地球研第Ⅱ期の未来設計イニシアティブと同じ言葉が使われています。どのような目的と経緯から拠点は設立されたのでしょうか。

Initiative という言葉に在る意味

窪田●設立時、英語名をどうするかは議論になりました。最初の候補は Initiative でなく Center だったのですが、しっかりこなかったことからこの言葉になったのだと思います。つまり、この拠点の位置づけとして「新しいなにかを考え出す」という方向性を与えたのです。私は3人目の拠点リーダーですが、前任の2人(中尾正義さんと鄭躍軍さん)は、それぞれ自身の考えを将来、新しいプロジェクトとして結実させる方向性で考えていました。私はむしろ、まず既存のプロジェクトどうしを結びつけることを考えました。

具体的には、地球研にいくつかある中国を対象とするプロジェクトを「中国環境問題」という軸でクロスカッティングする役割を拠点が担い、新しい視点を提示するという当初の目標を徹底することにしました。拠点が独自の活動をすることで、プロジェクトとの距離が開いてはいけないと思ったからです。プロジェクトとうまく共同

中国環境問題国際シンポジウム

回	開催日	タイトル	開催場所
1	2007年10月19日	水をめぐる麗江古城の環境思想と環境保全—持続可能な「つぎなる社会システム」の構築に向けて	京都大学人文科学研究所
2	2007年11月9日	社会開発と水資源・水環境問題に関する国際シンポジウム	国際会議大酒店(中国南京市)
3	2008年11月1日	日本と中国における食と環境に関する国際シンポジウム	江蘇省農業科学院(中国南京市)
4	2009年11月2日	中国における都市化の進展と環境問題	復旦大学(中国上海市)
5	2010年11月2日	西南中国の開発と環境・生業・健康	雲南大学(中国昆明市)

したかったのです。

たとえば、各プロジェクトにはカウンターパートがあります。そこで、拠点が複数のカウンターパートを結びつけ、中国国内を含む日本の内外で新たな広いネットワークをつくることに意義があると、私は考えたのです。それはある程度、果たせたと思っています。

地球研のプロジェクトをつなぐ、中国に地球環境問題をつなぐ

榎林●なるほど。それではこれまで、具体的なトピックを設定して国際シンポジウムや研究会などを催してこられましたね。どんなねらいがあったのでしょうか。

窪田●初期の活動では、「水」(第1・2回)、「食」(第3回)に関するテーマを設定して国際シンポジウムを開きました。各プロジェクトが扱っている共通のテーマを拠点として拾いあげたのです。しかし、たくさんプロジェクトに共通するテーマにはかぎりがり、限界が見えてきました。それに、イニシアティブ的なことを考えると、プロジェクトでは扱っていないけれど大事なテーマを考えてみたいと思ったのです。そういうことで、第4回国際シンポジウムで扱ったのが「都市と農村」。

榎林●窪田さんがリーダーになって、最初の国際シンポジウムが、「中国における都市化の進展と環境問題」ですね。
窪田●そうです。テーマとしてはよかったです。「都市と農村」の二項対立的な問題だけでなく、その境界付近に矛盾が現れや

すいこともわかりました。

都市と農村は、避けて通れない課題です。しかし、地球研の内側にこの問題をリードできる人材がいないと、やはり外側とうまく連携できない。そこでもう一度、地球研内部での連携を模索したのが、「エコヘルス」を掲げる門司プロジェクト*1との共催シンポジウム「西南中国の開発と環境・生業・健康」です。

しかし、門司プロジェクトも中国での活動は、その時点では本格化しておらず、すでに終了していた秋道プロジェクト*2の遺産を引き継ごうとしていたところでした。そこで、両プロジェクトをつなぐこともシンポジウムの目的にしました。つまり、終了プロジェクトの遺産を、「地域」だけでなく「時間」的にもつなごうという狙いです。そうすることで、互いに面識のない中国の研究者どうしが拠点の活動をきっかけに共同研究をはじめたり、中国の研究者と拠点とが共同で中国で出版*3するなど、中国研究者側も私たちの拠点をうまく利用してくれました。

榎林●終了したプロジェクトも含めて、地球研のプロジェクトどうしをつなぐだけでなく、中国の環境研究者の世界に、「地球」環境問題を持ち込んだんですね。

窪田●そう。個々のディシプリンではなく、地球環境問題からの視点が必要だということを伝えようと思いました。

榎林●いいですね。もう一つ、中国に関係してこなかったプロジェクトを中国につなげることもできるのではないのでしょうか。中国国内の環境問題のほかに、中国が関係する国外での問題はありますか。
窪田●あります。たとえば、早稲田大学



* 尹 紹亭、窪田順平主編『中国文化和環境』雲南人民出版社 2010年、
原田正純著・包 紅茂、郭 瑞雪訳『水俣病』北京大学出版社 2012年など。
写真は後者の書影。包北京大学副教授は招へい外国人研究員として拠点に滞在した



雲南大学と共同で開催した第5回国際シンポジウム

拠点では、経済の面から中国がアフリカに資源獲得に出て行く問題にアプローチしている。これは参考になりますね。アフリカ・アラブをフィールドに活動している縄田プロジェクト^{*3}とも結びつくかもしれない。

じつは、第5回国際シンポジウムにインドシナ半島の研究者をよぼうと考えました。つまり、インドシナ半島を一体化して捉えないとうまく突破口が開けない。でも、なかなか難しいところです。

環境問題が発生する構図を捉える

榎林●窪田さんご自身が、中国における地球環境問題について、考えていることを聞かせていただけませんか。

窪田●研究プロジェクトとしての参加も含め、この10年間、中国に向きあってきました。初めてのとてもよい経験でした。しかし、10年間とはいえ、中国社会の動きが速く、環境問題も大きく変わりました。農耕対遊牧、農地对草原は、環境問題を発生させる一つの構図でした。「農業開発が草原を侵食して砂漠化が起こる」という構図です。しかしそれは2000年代前半までのことです。いまや、半乾燥地帯においても鉱山開発などが進み、現代中国の産業構造や貨幣経済が圧倒的な影響力を発揮しはじめています。

その意味では、環境的に厳しい半乾燥地で農業をしようとするモチベーションはかなり落ちています。退耕還林はそれなりに成果をあげて、森林は回復しています。草原を開発して農業をすること自

くぼた・じゅんべい
専門は水文学。研究プロジェクト「民族／国家の交錯と生態変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷」プロジェクトリーダー。二〇〇二年から地球研に在籍。



まさばやし・けいすけ
専門は考古学。研究プロジェクト「東アジア内海の新石器化と現代化—景観の形成史」プロジェクト上級研究員。二〇〇八年から地球研に在籍。



体も少なくなりつつあるので、これまでのような砂漠化はなくなるかもしれない。ただし、日本人の多くはいまも植林に価値があると思っているが、そういう時代ではないのかもしれない。

榎林●問題の所在がどんどん変わっているのですね。シンポジウムのテーマを準備していたら、もう時代遅れになっているとか。どう対処すべきでしょうね。

窪田●より高位の次元で考えればよいのではないのでしょうか。発生する個々の環境問題は、ガバナンスの問題だからです。つまり、環境問題が発生する構図、対立的な社会構造を見ることが重要なのです。テーマが変わっても、どことどこが対立しているのかは、同じように見ることができます。森林だけ見てもわかりにくい。それほどものごとは単純ではない。

私たちは、中国の大きな転換期を目の当たりにしています。個々の実態は違うかもしれないが、対立の社会構図はそう変わらないと思う。それはつまり、中国とはなにか」という課題ではないでしょうか。

アジア型のなにかがあるはず

榎林●そこに来ますか。そこを問題にすると地域研究に戻ることはありませんか。話を拠点の存在意義に戻すと、まず中国環境問題研究のハブになる、次に中国の環境問題を世界の環境問題にする、ではないでしょうか。

窪田●だからこそ中国を知る必要があるのだと思いますよ。拠点の第Ⅱ期のテーマを「グローバル化する中国の環境問題」と「成熟社会の探索」にしたのは、そういうことです。中国の問題は中国だけにとどまらない。世界はすでに軍事力によって資源権益や貿易を支配した時代とは違う。政治的、経済的に影響力を強めた中国は、世界が共存しようというときに、どのような対外的な関係を築くのかで

す。これに着目すべきでしょうね。

環境問題で、市民が問題を指摘し、それが解決につながるというプロセスは、ヨーロッパ型です。しかし、それだけが解決方法とは思わない。私は「アジア型のなにか」があるとひそかに思っている。いまの中国からはまだ見えないのですが、それを探したい。だから、ガバナンスの視点が必要になる。個々の局面では変わるのかもしれないが、本質的にはそこが大事だと思うのです。

中国と地球環境問題を議論する

窪田●私は、だから第Ⅱ期の拠点では、中国の人と地球環境問題を議論したい。その一つを、大学からはじめます。中国の大学で地球環境学を講義して学生と議論する。これを手がかりに共同研究をはじめ。日本が研究する意義は、こうしたところから出てくるのではないのでしょうか。現在は、南京大学と北京大学とで準備しています。中国の環境問題を批判するだけでは彼らが受け入れないのは当たり前です。そういう従来の日本の研究のあり方を捨てたい。ともに取り組むスタンスにしたいのです。

榎林●環境問題を解決するのは、それぞれの地に住んでいる人たちが考え、行動することですよね。

窪田●そう。CO₂の排出量の問題では、中国は途上国としての権利を主張していますが、では「大国」中国としてはどのように「地球」環境問題を考えるのかを議論する。中国の環境問題はもとより、地球環境をどうすればよいのかを、ともに考えるきっかけになればと思います。

榎林●最後に、今後の抱負を一言。

窪田●拠点の活動のなかからいずれプロジェクトができ、それを基盤に、東アジア発の未来可能性のある社会のあり方が発信できればと思います。

榎林●ありがとうございました。

2011年10月17日 地球研「はなれ」にて

*1 研究プロジェクト「熱帯アジアの環境変化と感染症」

*2 研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005」

*3 研究プロジェクト「アラブ社会におけるなりわい生態系研究—ポスト石油時代に向けて」

地球研の社会交流 —— 地球環境学と社会のラポールを築くために

神松幸弘 (京都大学防災研究所研究員)



滋賀県立大学の学園祭での出展ブースにて

ちょっと、古い話から始まりますが、地球研の創設期の要覧(2000年)には、地球研の「設立目的」の一つとして、「研究成果を学問社会に閉じず、広く社会に発信する」と記されています。ここにも地球研をこれまでにない新しい研究所にしようという気概が込められていたと思います。しかしながら、新参の研究所は知名度が低く、なかなか認知されないものだという点も同時に痛感しました。京都市内で、あるいは野外調査の折に、「おたくは、どういう組織ですか?」と、よく尋ねられ、あれこれ丁寧に説明したにもかかわらず、「つまり、京都大学の研究所ですか?」と返された苦い思い出もあります。

未来の科学者への発信は 重大事かつ悦楽

私は、研究推進戦略センター(CCPC)で、研究所の成果発信に取り組んできました。とくに2009年からは、学校現場でいわゆる環境教育に力を注ぎました。今は亡くなった初代所長の日高敏隆さんが、「未来の科学者を増やすんだ」と、子どもたちにむけて、生物の話を続けてこられた志を継ぎたいという思いと、地球環境学の最大の貢献は「教育」だという二つの思いで始めました。所内の人づてや口コミから、出前授業や施設見学といった学校からのリクエストが次第に増え、触れ合った小学校、中学校、高等学校の児童・生徒ののべ人数は、3年間で1,700人に上

地球研研究室の見学(京都精華女子中学)

りました。充実した活動でしたが、反省点もあります。個々の学校と対応することは、細かなニーズに即することができる反面、数が多いと負担も大きく、また、独自の活動だけでは発信の効果が低いことです。今後は、発信力を持った組織や人とのつながりを強化することが必要でしょう。たとえば、学校の先生向けの研修会などを活用して、先生から子どもたちへ地球研の成果を発信してもらうなどです。今年の1月30日に地球研は、京都市青少年科学センターと環境教育に関する連携協定を結びました。この連携を活かした地球環境学の発信を大いに期待しています。

教育や社会交流を通じての成果発信は重要ですが、主たる業務ではないので、所内の研究者も積極的にかかわることが難しいという問題があります。ただ、研究者も一般の人びとへ自分の研究を知ってもらう、喜んでもらうことは、ときに自身の喜びにもなり、励まされもするのではないのでしょうか。昨年8月に行なった第1回地球研オープンハウスは、たった半日の開催でしたが、研究部、CCPC、管理部が一丸となり、432人の来場者に対応しました。研究者の誰もがいきいきと来場者に向けて説明しているようすがとても印象的でした。

工夫の余地は まだまだたくさんある

近年は、どこの大学や研究機関でも社会発信が盛んなので、発信の独自性も薄れがちです。市民向けのセミナーなどの、来場者の年齢層が固定化しているのも気に



実験室のデジタルマイクロスコープで昆虫の体を観察

なります。もっと多様な年齢、立場の人に目を向けてもらう努力が必要ではないでしょうか。ソーシャルネットワークサービスをはじめとする、さまざまなメディアを複合的に活用し、アンテナを広げてシーズを開拓していくことが重要だと感じています。また、魅力的な独自のコンテンツを開発することもたいせつです。研究業界全般にマスメディアへの露出も増えていますが、新聞で目にした成果について高校生や一般の方が検索しても研究用の難しいHPや論文しか見つからないことがほとんどです。わかりやすいコンテンツを先に用意して、それをマスメディアへ、独自のセミナー、出版に活かすなどの能動的な広報戦略を展開すれば、社会的ニーズとのズレもずいぶん解消するのではないのでしょうか。

地球研オリジナルの 教育体系を

最後に、地球研市民セミナーにお越しになる方から、「総合的な地球環境学を学ぶ大学院はどこにあるのか?」と尋ねられました。多様な分野の研究者が同居しているだけの大学院、学部ではなく、真の学際教育の学び舎が生まれるのはこれからでしょう。地球研の研究活動の蓄積がリソースとなり、地球環境学の教育体系が生まれることに期待しています。

こうまつ・ゆきひろ
専門は動物生態学。2003年から2012年1月まで研究推進戦略センター助教。

百聞一見——フィールドからの体験レポート

世界各国のさまざまな地域で調査活動に励む地球研メンバーたち。現地の風や土の匂いをかぎ、人びとの声に耳をかたむける彼らから届くレポートには、フィールドワークならではの新鮮な驚きと発見が満ちています



つながりに支えられて フィールドワークする ザンビアでの 社会ネットワーク調査から

伊藤千尋

いとう・ちひろ

専門はアフリカ地域研究、人文地理学。研究プロジェクト「社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス」プロジェクト研究推進支援員。2011年から地球研に在籍。

「俺が誰と仲がいいかなんて、チヒロは知ってるじゃないか。なんでいまさらそんなこと質問するんだ？」

質問の意図がさっぱりわからないといったようすで、友人は笑いながら私に答えた。ザンビア南部州の農村部で調査をはじめた4年目、2010年のことである。

人と人のつながりを調査する

私は、農村部の生計活動と都市とのかかわりについておもに研究を行なってきた。干魃が頻繁に起こるザンビアの調査村では、近郊都市への出稼ぎが重要な生計活動の一つになっている。とくに移動の意思決定に興味をもった私は、コネや人脈が移動者の都市での生活を支え、移動を促す前提条件になっているのでは、と感じていた。

そこで、移動の意思決定と移動者の社会関係との関連を、「社会ネットワーク分析(SNA)」を応用して調べようと考えた。

SNAは、人やモノ、企業などさまざまな行為主体と行為者間とを結ぶ紐帯を定量化して表現し、移動者の属性や環境ではなく、ネットワーク上に現れてくる特性から現象を解き明かす手法である。SNAを専門とする先生との幸運な出会いに助けられた私は、2010年のフィールドワークで、調査地の人びとの「つながりの構造」について聞いてまわることになったのだ。



調査助手のラフォード(中央)とその家族。赤ん坊は、彼にとっての初めての男の子。出産には私も立ち会った



調査期間中に私が使う家屋の屋根を、同居している家族が直してくれているところ

調査から見えた新しい世界とジレンマ

調査は、対象者の信頼関係のネットワークに都市居住者が含まれているほど都市への移動がしやすいのではないかと、いう仮説のもと、「困ったときに頼れる関係にある人」を5名以内挙げてもらうという手法で実施した。

ふだん村の中を歩き回っているため、誰と誰が友達か、親族関係にあるか、同じ教会に通っているかなど、自分ではだいたい把握しているつもりだった。冒頭の友人が投げかけた疑問にも、内心「まあそうかも……」と思っていたかもしれない。

しかし調査を進めていると、めったにいっしょに歩いているのを見ない人同士の思いもかけない信頼のつながりが見えることも少なくなかった。出稼ぎの回数が多い人ほど、都市部の人とのつながりが多いという傾向も見えはじめた。

そしてなによりも、出会いにまつわるエピソードを聞くたびに、その人の人生や人柄への理解が深まり、他の調査にも関連するヒントがつつぎと浮かび上が

ってきた。私はこれまでの調査では見えてこなかった世界をそこに感じ、わくわくしていた。

いっぼうで、この調査をはじめ前からの悩みは消



乾季の調査村。赤土に覆われて乾いた風景と、パオバブの木が目に入ればバスを降りる目印

えなかった。それは、調査地の人に甘えているからこんな調査ができるのだ、という思いだ。たとえば日本で私が近所の人に同じような質問をして回ったら、答えてくれる人は何人いるだろうか。

もちろん京都での近隣の人との関係は、調査村の人と私との関係と大きく異なるものであることは間違いない。それでも調査で得られるものの大きさを感じるたびに、みんなを嫌な気持ちにさせないだろうかというジレンマを抱えていた。

いつか絶対!

調査を終え、首都ルサカに戻る日がやってきた。私は同居している家族に別れを告げ、調査助手をしてきている友人に「今回もいろいろ無理言ってごめん、ありがとう」とお礼を言った。すると彼は「チヒロの調査には毎回振り回されているから、もうぼくも家族も慣れっこだよ」と言い、奥さんと笑っていた。

バスに乗る私を見送ってくれる彼らを見ながら、自分の調査がいろんな人との出会いと支えのつながりのなかで成り立っていることをあらためて思い知らされ、もやもやした気持ちが少し和らいだ気がした。

彼らが私に期待していないのは知っているけれど、私の研究は正直言って、すぐに還元できるようなものではない。いまのところは彼らにどっぷり甘えつつ、いつか大きななにかを返してやる! とひそかに意気込んでフィールドを後にした。

参加者のレポートと総括

2011年度 研究プロジェクト発表会
2011年11月30日(水)~12月2日(金)
(コープイン京都)

総括 ● 渡邊紹裕 (地球研教授・副所長)

年に一度、各プロジェクトの進捗を点検しあう研究プロジェクト発表会。この地球研の最大イベントが今年度も3日間にわたって開催された。初日はFS (Feasibility Study: 予備研究) の報告が10課題。うち三つは基幹研究ハブが主導する基幹FSの

報告であった。2日目は資源、多様性の両プログラムのPR (Pre-Research: プレリサーチ)、FR (Full Research: 本研究) とCCPC (研究推進戦略センター)の報告、3日目は循環、文明環境史、地球地域学プログラムのFRと基幹研究ハブの報告、さ

らに総合討論が行なわれた。レビュー委員として参加した地球研の在籍経験者、および所内のそれぞれ二人ずつから寄せられたコメントと、全体とりまとめを務めた渡邊紹裕教授の総括により発表会を振りかえる。

総括

創設から10年が経ち、地球研第II期中期目標・中期計画の2年目である本年度は、事業本格化の年に当たる。第II期では、未来可能性をデザインすべく、認識科学的アプローチを横断的に統合し設計科学的アプローチを重視した未来設計イニシアティブの展開が要請されている。それを中心的に担う基幹研究ハブにも専門のスタッフが配置された。今回の発表会でもこの方向に沿って、試行的な部分が多いながらも、基幹研究プロジェクトをめざす基幹FSが初めて複数提案された。

*

本格的に動き出した基幹研究に対して、「枠組みはともかく、中身が見えない」「これまでとの違いが分からない」などの意見を所内外でまだ耳にすることがあ

る。ここに寄せられた陀安さんのコメントでも、その明確化の必要がとくに指摘されている。これは、地球環境学の構築という目標に向けての、アプローチの具体的な態様や進捗の現実について、認識にまだかなりの幅があるためであろう。また、細谷さんのコメントにもあるが、さまざまな考えや思いを前提にして、束ねるのが地球研の役割であり、宿命でもある。この違いを認め、それを踏まえてさらにつながりを深めていく象徴的な場がこの発表会である。会の冒頭、立本所長からも「共感によるつながり」、「バラバラでいっしょ、違いを認め合う」ことを基礎に置くコミュニタス構築への「居敬究理^{きよけいきゅうり}」の努力の要請があった。

そうしたなか、今年度の発表会で参加者が改めて考え直すことになったと思

われるのは、プロジェクトやリーダーにおける「専門性と文理融合・総合性のバランスとウェイト」の問題である。これはここにコメントを寄せられた方も、みな共通して触れられている。これは、連携研究プロジェクトと基幹研究プロジェクトの違い、個々のプロジェクトと地球研全体のミッションの関係、この発表会での報告の内容と質疑の立て方などの根本にかかわることである。

*

いま地球研は創設から11年目が終わろうとし、19のプロジェクトが完了しようとしている。プロジェクトのあり方と合わせて、それを方向づけ、支えてきた研究プロジェクト発表会のあり方も、白岩さんの指摘する公開の程度を含めて、改めて見直すときだと実感した。

■ コメント 1 ■ プロジェクト発表会は今年も憂鬱..... 細谷 葵 (地球研プロジェクト研究員)

研究プロジェクト発表会は、多くのリーダーにとって憂鬱なものであるように見受けられる。本来ならこの会は、それぞれのプロジェクトで精一杯に研究した成果を所内の他のメンバーに披露することで、プロジェクト内部だけではさすれば自己撞着におちいりがちな空気に、厳しい指摘も含めて新鮮な意見を吹き込んでもらえる、法悦ならぬ「学悦」の場であるはずだ。なぜそうならないのか。それを考えながら、今年度の発表会に臨んだ。

今年度は初めて、FS審査・発表に、地球研が主導して行なう基幹FSが3件含まれた。各基幹FSとも、「設計科学」を意識するなど、第II期の地球研の方向性を考えた努力が見て取れた。しかし、なにをもって「基幹」FSとするのかの定義が、地球研の誰にも見えていないようだった。CCPCの発表では、研究推進部門に対する、すなわち地球研の研究がめざすべき道に関する質疑が集中した。ようするに、

地球研の誰もが目指すべき「環境学」がどこかに存在すると皆イメージしているのだが、暗中模索で出口が見えない。だがそのイメージに縛られているので、「あなたたちの研究は環境学ではない(=私の考える「環境学」のイメージとちがう)。地球研に貢献していない」というような不毛なコメント、メンバーに理系と文系の研究者が何人いるかなどの、形だけにこだわる質問が多発する。いきおいリーダーは、文句を言われぬよう無難に発表するだけ、という「守り」に入る。だから憂鬱な会になるのだ。

「誰もが目指すべき環境学」を探る旅が暗夜行路に入るのは当然で、そのようなものはありえない。よしんばあったとして、その同じことを皆がやるのなら、15もプロジェクトがある意味がない。プロジェクトごとに異なる「環境学」があってよい。大事なものは、学問的に質の高い研究の上にそれを真摯に模索し、

成り立たせるという姿勢である。そのためには、各プロジェクトの個性、すなわちプロジェクトリーダーの専門を、もっと前面に出せるようにしても構わないと思う。今回の発表会で、「リーダーの専門をもっと取り入れたら、おもしろい研究になったのでは」というコメントが2回ほど出ていたのは象徴的だった。質の高い研究は、ある程度専門に集中しなければ難しい。そして、質の高い研究を極めれば、自然に視野が広がり、学際的になっていく。研究内容に即して実質的に必要な諸分野のメンバーが集まり、形だけ多分野を揃えるということはなくなる。評価委員会など対外的な場では、ある程度形を繕う必要もあるだろうが、せつかくセミクローズドにしたプロジェクト発表会は、もっと「実」を取る、そして建設的な厳しさをもって臨む、「学悦」の場になってもよいのではないだろうか。

報告者

ほそや・あおい

専門分野：植物考古学、民族考古学

所属プロジェクト「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」

ひやま・てつや

専門分野：生態水文学、水文気象学

研究プロジェクト「温暖化するシベリアの自然と人—水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応」プロジェクトリーダー

しらいわ・たかゆき

専門分野：自然地理学、雪氷学

研究プロジェクト「北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価」(2005-2009年度に実施)プロジェクトリーダー

たやす・いちろう

専門分野：同位体生態学、水域生態学、土壌生態学

2002-2003年に地球研に在籍

■ コメント 2 ■■■■■ 地球研の古くて新しい問題…………… 檜山哲哉 (地球研准教授)

今年度終了予定のプロジェクトが5件あり、それぞれのリーダーの姿勢が5人5様で大きく異なったため、一聴衆としてかなり楽しめる発表会であった。筆者のようにプロジェクトを継続中のリーダーにとっては、どのようにプロジェクトをまとめるべきなのかを考える上で、参考になった。そして総合討論などで議論されたように、そもそもの自分の discipline を大切にプレゼンにすべきか、あるいは地球研の目指す transdisciplinarity を前面に出すべきか、または特定の discipline に偏った内容であってもリーダーの専門とは異なるプレゼンでよいのか、など、第II期中期計画前半の地球研の状態を見せつけられた

ような気がした。筆者は、少なくともプロジェクト研究員レベルでは、個々人の discipline に根ざした研究をすべきであると考えている。おそらく地球研に在籍している研究員の多くは、その意識の下で研究していると思われる。ところがとても驚かされるのは、プロジェクトリーダーやその他の研究教育職員以上に、transdisciplinarity 的な総合地球環境学の構築に挑戦している若手や中堅の研究員が多いことである。十人程度、おられるであろうか。この人数が多いか少ないかは別として、文理融合・連携を設立理念に有する研究所としてはたいへん喜ばしい限りである。(彼らの今後の職をどうにか保証できないものか。) この

状況を鑑みると、既存の discipline での業績をある程度有するプロジェクトリーダーは、transdisciplinarity をもっと前面に出し、総合地球環境学の構築に専心すべきであろう。この点については、筆者の今後の課題として精進したい。さて、本来であれば災害復興に使うべき血税の一部を少なからず費やしている地球研としては、プロジェクト発表会での質疑コメントは厳しくあるべきであろう。成熟縮退社会を先取るわが国ではあるが、地球環境問題を解決するために設立された世界的に希有な研究所として、緊張感ある姿勢で研究に勤しむべきと思う。より一層、躍動感あふれる研究をしていきたいと思う。

■ コメント 3 ■■■■■ もっと誇るべき、分野横断のユニークさ…………… 白岩孝行 (北海道大学低温科学研究所准教授)

地球研の活動も 10 年を過ぎ、地球環境に関する多くの知見が地球研に蓄積されるようになったことを実感する発表会であった。また、先行プロジェクトと類似、あるいはそれを継承した新しいプロジェクトの発表があり、先行研究で得た知見が新たなプロジェクトによってさらに深められていくようを見せてくれる発表会でもあった。

FS、PR 研究についてみると、人文社会学的な視点からのプロジェクト申請が増えたことが印象深い。これは地球研のめざしてきたことであり、望ましい方向と言える。いっぽう、自然科学を中心に据えるプロジェクト申請は

減少したが、これについてはやや危惧を覚える。ここ数年にわたって地球研が自然科学指向のプロジェクトをリジェクトしてきた結果は、それらの申請が地球研の基準に達しなかったという事実を越えて、地球研の外にいる多くの自然科学者に、「地球研は自然科学研究を一切指向しない」という誤ったシグナルを与えてしまった可能性はないか。

地球研は、個人研究を旨とする大学とは異なり、明確な使命を持った研究機関である。研究者個人の興味や専門が生かされるようなプロジェクト運営が望ましいが、それはあくまでも手段であって、目的ではない。総合討

論において、個人の専門や興味を重視すべきであるという趣旨の発言があったことに、やや驚いた。これは、プロジェクトリーダーとメンバーの間で解決されるべき問題である。

地球研に在籍の間は意識しなかったが、大学に戻ってみると、相変わらず専門領域の分化は著しい。地球研は、この発表会にみられるように学問分野を越えた建設的な議論を進化させてきた。これはきわめてユニークな機会であり、地球研が対外的に誇れるもっとも重要な無形文化であるかもしれない。秘密保持の問題はあるが、発表会の一部公開を検討してはどうだろうか。

■ コメント 4 ■■■■■ ミッション達成へ、より具体的な戦略を…………… 陀安一郎 (京大学生態学研究センター准教授)

年末恒例の地球研プロジェクト発表会に参加させていただいたので、いくつかの私見をコメントさせていただきたい。

1. FS発表について……初日はどのような新しいプロポーザルが聞けるかと楽しみな日であるが、今年は2点気になった。1点目は、FS発表の本来の目的はFRに至る研究計画を提案する場であったと思うのだが、その意図が見えない発表があったことである。2点目は、連携FSと基幹FSの違いについての説明が少なすぎて、よくわからなかったことである。所内・所外のアイデアを基に、基幹研究ハブメンバーを中心にインキュベートするという発想で行うのが基幹FSということであれば、連携FSとここが違うことを示して欲しかった。

2. プロジェクトの個性について……終了プロジェクトは、各リーダーの個性がよくでてい

て面白かった。その中で、長田俊樹さんの「評価委員会は、自分たちが出したプロジェクトに対する助言の責任をどこまでとるのか」という発言は重い。プロジェクト単位で地球研の特色をすべて考えた計画にすべきか、地球研全体としてミッションをカバー出来ればいいのか、という命題を再び考える機会になった。以前、後者のやり方は制度上も行なえなかったわけであるが、基幹研究ハブというシステムが出来たので、地球研のミッションを強くかかげる基幹研究と、各プロジェクトの自由な発想を基にした連携研究に差別化できるように思えた。

3. 新しい方向性について……連携研究を受け入れるだけでは達成できなかった機能を、戦略策定部門という枠組みを使って国際連携を推し進めるという提案がされた。地球レベルの問題を、地域レベルの多様性の議論に落と

して研究するのが「地球研らしさ」というイメージはあるが、国際的な枠組みに則することは「地球環境学」であるかぎり避けられないだろう。また、大型機器の有効活用に関する話題も行われた。地球環境問題に関するトレーサビリティを扱える強いツールをCCPCが持つておくことは、基幹研究ハブのもつ「指揮機能」に対して、「職人機能」として基幹・連携プロジェクトに貢献するであろう。大学共同利用機関として広義の連携機能を深める仕組みづくりが望まれる。

4. 全般に関して……以上、一人のOB研究者として概念ベースで書かせていただいたが、任期制の弊害も含め、だれがこの仕事をするのかという問題は絶えずついてまわる。生身の研究者がどのように研究を進め、地球研のミッションをどう達成するか、ご苦労は絶えないと思うが今後のご発展を期待している。

連携プロジェクト再考

白岩孝行(北海道大学低温科学研究所准教授/総合地球環境学研究所客員准教授)

オホーツク海や親潮にみられる突出した基礎生産性の高さは、アムール川が運ぶ溶存鉄によって支えられている、という仮説を検証することが私たちのプロジェクトの主題でした。もちろん、これだけでは「文理融合」を理念とする地球研のプロジェクト研究にはなりませんから、溶存鉄の生成に果たすアムール川流域の土地利用の状態、変化の歴史と背景解析を加え、溶存鉄の供給地における人間の役割を明確にすることを試みました。また、プロジェクトの出口においては、変化しつつある陸と海の連環を保全する仕組みの構築を試みました。



世界の森と川と海の関係にいち早く注目し、保全への警鐘を鳴らしていた開高健と共に

高敏隆前所長が用いた例えですが、これはなかなか難しい課題です。規模の限られた地球研という容れ物の中にある素材には限りがあります。素材やプロジェクトの入れ替わりがあるとは言え、10年も炒めていると、味も単調になってしまうことは避けられません。

持ち逃げされない工夫を

自然科学の分野で、年間予算9ケタ近いプロジェクトを立ち上げることは至難の業です。科研費であれば、基盤研究A以上のカテゴリーに相当するわけですが、これを得るためには、関連テーマについての長年にわたる研究実績が求

電子レンジ系プロジェクトと呼ばれて

プロジェクトの成り立ちと、自身が在籍出向という立場で地球研に籍を置くことになったことから、私たちのプロジェクトは地球研で言う「電子レンジ系」プロジェクトとみなされていたようです。つまり、北大で用意した素材を、地球研という電子レンジで温める、という意味です。ですから、プロジェクトリーダーとしては、上賀茂の電子レンジでしか生まれえない味を出し、それを地球研の成果として発信することで、連携プロジェクトが有益であることを証明したいという思いがありました。結局、これは多国間学術ネットワークとしてのアムール・オホーツクコンソーシアム設立として結実するのですが、その評価は、今後のコンソーシアムの活動にかかっていると見るべきでしょう。

五目チャーハンのつらさ

「電子レンジ系」が若干否定的なニュアンスを持つ言葉とするならば、「五目チャーハン」は、地球研プロジェクトの理想を表す言葉です。地球研というフライパンの上で、様々な一級の素材(人材)を炒めることにより、

ひとつの素材では出ない味(学問)を出すのが地球研の創出する総合地球環境学である。日



懐かしのアムール・オホーツクプロジェクト四人組

められることが普通ではないでしょうか。一方、地球研ではインキュベーション研究、予備研究、プレリサーチという3年間で本研究を立ち上げることが求められます。個人研究がそのままプロジェクトとして認められることはほとんどないので、地球研は実質的に3年間の準備期間で新たな大プロジェクトをスタートさせることを要求しているわけです。

そこで連携研究の活用です。日本や世界の数多ある大学・研究機関には、多くの魅力ある素材が地球研の電子レンジにかけられることを待っています。黙っていい素材も集まりません。ひとつ提案ですが、市民向けに開いている地域連携セミナーを、研究者相手のセミナーに変えてはどうでしょうか。毎年の研究プロジェクト発表会で繰り広げられる議論を各地で披露すれば、地球研に対する興味は高まるはずですよ。

もうひとつ。連携研究を生かすには、出来た料理を持ち逃げされない工夫が必要です。地球研ブランドのシールを貼っておくことが不可欠です。私の考えでは、地球研が主導する英文ジャーナルの創出とそこへの投稿義務が決定版だと思います。今一度、ご検討いただければ幸いです。

しらいわ・たかゆき

2005-2009年度にかけて実施された研究プロジェクト「北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価」(通称:アムール・オホーツクプロジェクト)のプロジェクトリーダー。プロジェクトで創出したアムール・オホーツクコンソーシアムの運営が目下の大仕事だが、北海道の河川流域の研究も模索中。

所員紹介—私の考える地球環境問題と未来

ブーゲンヴィルの危機言語 言語多様性と地球環境問題

大西正幸

(地球研プロジェクト上級研究員)



ナーシオイ語の話者たちと

危機言語(消滅の危機に瀕する言語)の記述・記録が、私の中心的な研究です。

言語多様性と生物多様性の喪失

今日世界には6千前後の言語があるとされていますが、言語学者の推定では、その50%から90%が今世紀末までに消滅します。この近い将来消滅が予想される言語が危機言語です。植民地支配や近年のグローバル経済の暴力的な介入などが原因で、地域の自然・社会環境が劣化し、ある場合は政治社会的な抑圧により、またある場合は経済的な理由から、人びとは自分の言語を捨てて地域共通語や英語、スペイン語のようなメガ言語へ乗り換えることを余儀なくされています。言語多様性の喪失は、多くの場合、その地域の生物多様性の喪失とリンクしていることが指摘されています。

一つの言語が失われることは、一つの認識体系が失われることを意味します。次に私の体験から例をあげてみましょう。

■リーダーからひとこと

長田俊樹(地球研教授)

あるときはタゴールの翻訳家、またあるときはベンガル映画の解説者、そしてまたあるときはインド楽器の演奏者、はたまた日本語教師や英語教師と、多様性を自ら体現してみせる大西さんは、30年前と少しも変わらぬ容姿で、ブーゲンヴィル島で危機言語を記録する。今度は何をやってくださるのか。今から楽しみだ。

環境への適応戦略としての認識体系

私のフィールドの一つは、パプアニューギニア東端の島、ブーゲンヴィル島です。この島の南部で話されているいくつかの危機言語を研究対象としています。これらの言語の話者たちは母系社会を形成していて、人びとはみな網の目のような親族関係の中に位置づけられます。私は研究協力者のお母さんに息子として受け入れられました。島で人と会うたびに、私はまず頭の中にその母子関係を起点とした系統図を描き、それに基づいて相手をどの親族名称で呼ぶべきかを考えます。その親族名称によって、名詞の所有形、動詞の変化形など、会話に不可欠なさまざまな要素が決まるからです。民話の中の動物たちすら、同様の親族関係で互いに結ばれているのです。相手が社会的タブーの関係にある時(たとえば義母と婿)には、話はさらにややこしくなります。相手の名前の最初の音節で始まる単語が使えず、すべて別の単語で置き換えなければなりません。たとえば義母の名前がRokumaなら、婿は彼女との会話でroで始まる単語をいっさい使えないのです。

また、これらの言語は、川の流れや山と海岸の位置関係を基準に定められる方向、対象と話者との間の遠近、対象の動きの方向等を表す指示詞を、頻繁に使います。日本語であれば「この石」「あの人」で済ますところを、「川下のすぐ近くにあ



地元マーケットの風景

る石」、「上方の少し離れた山の方角からこちらに近づいてくる人」という風に特定しなければなりません。こうした指示詞をすぐに使えるように、話者たちは周囲の自然環境の空間指標につねにアンテナを張っているのです。

これらの言語の話者たちは、このように、土地環境への適応から生まれた固有の認識体系を、身体化してもっています。このような言語を失うことによって、人類は、世界を把握する方法を一つずつ失い、環境への適応能力を次第に狭めていってしまうのだと思います。

多様性の維持をめざして

島に行くと、私は伝統文化に詳しい何人かの話者たちから、それぞれの言語の語彙や文法を聞き書きし、民話、クラン(氏族)の由来についての神話、個人史などを録音します。下の写真にあるイボアンジさんは、80歳です。少年時代、島を占拠していた日本軍の一人の兵士が開いた学校に通っていたので、いまだに片言の日本語を話し、「鳩ぼつぼ」などの童謡を歌います。彼の先生だった兵士は、後に戦いが激しくなったころ、連合国軍の側についた村人たちに殺されたそうです。彼はこの話をする時、いつも涙ぐみます。私は、村の子どもたちに日本語を

教えるのだと言う彼のために、彼の母語ナーシオイ語と日本語の比較語彙集を作る約束をしています。



イボアンジさん

おおにし・まさゆき

■専門分野 言語学、文学

■地球研での所属プロジェクト

「環境変化とインダス文明」

■研究テーマ 危機言語と口承文化の記述・記録(北東インド、沖縄、ブーゲンヴィル)、近現代ベンガル語文学

■趣味 インド古典・民族音楽、西洋クラシック音楽。今まで住んだことのある都市の中で、とくに好きなのはカルカッタ(コルカタ)とライブツィヒ。どちらも街に音楽があふれているから

イベントの報告

第10回地球研地域連携セミナー

報告 水辺の保全と琵琶湖の未来可能性
2012年1月14日(土)13:00~17:30
(ピアザ淡海 ピアザホール)

第10回地球研地域連携セミナーは、自然の宝庫でもあり人間生活とも密接なかわりのある琵琶湖を舞台に、水辺環境の保全における課題を市民、行政、研究者などそれぞれの立場の人びとが共有することを目的に開催されました。

まず、嘉田由紀子滋賀県知事が基調講演で「高度経済成長期を経て、琵琶湖は暮らしから心理的にも社会的にも遠い存在となった」ことを指摘されました。昨年10月にマザーレイク21計画を改訂し、湖が近い存在になるようなくみづくりが進められているとのこと。次に琵琶湖博物館学芸員の金尾滋史氏からは、琵琶湖周辺に生息する魚類とその生態について、自身の研究成果を踏まえながらご紹介いただきました。地球研の源利文上級研究員からは、コイヘルペスウイルス病を例にあげ、人間による水辺の環境変化により病気が起こりやすい環境を作り出している可能性を、地球研プロジェクトの研究成果を示しながら報告がなされました。堀越昌子滋賀大学教授からは琵琶湖の魚介を使った食文化について具体的な料理を紹介しながらご解説



いただきました。中島経夫地球研客員教授・うおの会名誉会長には、「うおの会」の活動をご紹介いただくとともにその活動から得られた在来魚と外来魚の生息地がはっきり分かれている例について紹介がありました。

パネルディスカッションでは、200名を超える参加者の中からウイルスに関する専門的な質問から、外来魚侵入の現状や琵琶湖の魚を使った料理に関する内容まで幅広い質問をいただきました。最後の「よい水とはなにか?」との質問には、各パネリストから多様な環境のある水辺、食べ物を生み出せる水辺、身近に感じられる水辺、そして立場によってよい水は異なるとの意見が出ました。水辺の環境管理には総合的な物の見方が必要であり、琵琶湖で得られた研究成果や問題解決の経験は世界の湖沼にも適用可能であり共有することが重要というのが今回のメッセージです。
(本庄三恵)



人間文化研究機構 連携展示

報告 展示 & ワークショップ「地球の感じかた：子どもたちに伝える自然と文化」
2011年11月22日(火)~12月4日(日)
(台湾：国立台東大学、国立台東大学附属小学校)

地球研所蔵の「国連子供環境ポスター」を活用したワークショップおよび展示を国立台東大学児童文学研究所、国立台東大学附属小学校と連携して開催しました。児童文学研究所の大学院生と一緒に企画したワークショップは「ポスターを使った環境絵本づくり」。100枚のポスターの中から小学生が自分の好きな絵を1枚選び、班ごとに集まった絵を読み解きながら、1つの物語をつくります。

普段から美術教育に力を入れ、「美班(美術クラス)」もある附属小学校の子どもたちは、絵本の表紙や装幀も全て自分たちで行ない、10冊のオリジナル絵本が完成しました。その後、完成した絵本とともにポスター展「世界環保児童画展」を、同じく台東市内にある「聖母健康会館」および小学校内にて開催し、多くの地元の方がたに来ていただくことができました。(菊地 薫)

研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)

2011年11月15日~2012年1月31日開催分

開催日	タイトル	主催(プロジェクトリーダー)	開催場所
11月15日	第4回 食リスクプロジェクト研究会「生物多様性の経済評価」	嘉田良平	地球研セミナー室
11月22日	第3回 基幹研究ハブ研究会「設計科学的統合の表現方法1:科学」	基幹研究ハブ	地球研セミナー室
11月22日	第23回 資源・地球地域学プログラム合同研究会	資源領域プログラム 地球地域学プログラム	地球研講演室
11月24日	第1回基幹FS「東アジア成熟化社会」研究会・第2回 QOL研究会 合同研究会 「幸福の概念と計測に関するレビュー」	佐藤洋一郎 メガ都市プロジェクト	地球研プロジェクト研究室
11月25日	第41回 エコヘルス研究会 The KEMRI-Nagasaki Kenya Research Project on Tropical Infectious Diseases	門司和彦	地球研セミナー室
11月29日	第12回 EPM勉強会「地域環境協力におけるデータ・情報の共有」	EPM勉強会	地球研プロジェクト研究室
12月5日	第72回地球研セミナー A Transdisciplinary Approach to Energy Sustainability	地球研	地球研セミナー室
12月8日	第16回 中国環境問題ワークショップ・第5回 村松FS研究会 「中国の環境史・人口史研究の現状とGISの活用」	中国環境問題研究拠点 村松弘一	地球研セミナー室
12月8日	シベリアプロジェクトゼミ The determination of permafrost thawing from long-term streamflow measurements: The case of eastern Siberia	檜山哲哉	地球研プロジェクト研究室
12月9日	第2回 基幹FS「東アジア成熟化社会」研究会「現代における人口諸問題とその人口学メカニズム」	佐藤洋一郎	地球研セミナー室
12月13日	第4回 基幹研究ハブ研究会	基幹研究ハブ	地球研セミナー室
12月14日	第28回 中国環境問題研究会「地球規模水銀汚染と胎児影響及び中国での調査報告」	中国環境問題研究拠点	地球研セミナー室
12月15日	インダスプロジェクト講演会「言語学者から見た弥生時代の新年代」	長田俊樹	地球研講演室
12月15日	シベリアプロジェクトゼミ「レナ川における河川流量の年々変動およびその大気水循環との関係」	檜山哲哉	地球研プロジェクト研究室
12月15日	第29回 中国環境問題研究会「生態環境と調和した地域開発戦略」	中国環境問題研究拠点	地球研セミナー室
12月19日	第5回 食リスクプロジェクト研究会「Moderating Urban Sprawl through a Two-Rate Property Tax」 「How High Gas Prices Triggered the Housing Crisis: Theory and Empirical Evidence」 「Optimal Location, Size and Budget of Open Space Conservation」	嘉田良平	地球研セミナー室
12月20日	第73回 地球研セミナー「アジアの人々と水の関わり—民際学の視点から」	地球研 渡邊紹裕 梅津千恵子 阿部健一	地球研講演室
12月22日	第13回 EPM勉強会「トルコセイハン河流域における不確実性下の水管理」	EPM勉強会	地球研セミナー室

出版物紹介



シリーズ“Current Studies on the Indus Civilization” Volume I~VIII (Part1・2)

長田俊樹・上杉彰紀編
(Volume I~VII)

Randall William Law著 (Volume VIII Part1・2)
Manohar Publishers & Distributors (インド)

研究プロジェクト「環境変化とインダス文明」(インダス・プロジェクト)では、プロジェクトの成果として、これまでに Occasional Paper: Linguistics, Archaeology and the Human Past のシリーズを出版してきました。ご存じのように、プロジェクトの名前で出版したものは部数にかぎりがありますし、基本的に国内のプロジェクトメンバーや日本にいる研究者などに配布するのがおもな出版目的です。そこで、インダス・プロジェクトの成果を国際的に知っていただくためにインド、デリーのマノハル出版社から“Current Studies on the Indus Civilization”というシリーズで再出版することになり、今回、第1巻から第8巻をみなさまにお届けすることができました。プロジェクト期間中に成果物の刊行にこぎつけることができたのは、ひとえにプロジェクトメンバーたちのご協力ご支援の賜物で、この場を借りて感謝します。

このシリーズのおもな内容は、インダス・プロジェクトで発掘をしたインド、グジャラー

ト州のカーンメール遺跡とインド、ハリヤーナー州のファルマナー遺跡の年次発掘報告書をはじめ、内外の

研究者からの論文が集められています。また、インダス文明研究の金字塔ともいえる、ランディー・ローの博士論文に基づく大冊を二分冊にまとめて出版するなど、インダス文明研究にとって多大な貢献ができたのではないかと自負しています。なお、マノハル出版社のご好意で、このシリーズをプロジェクト終了後も続けていく予定で、現在、インダス文明遺跡のうち発掘された遺跡の概要を、インド版とパキスタン版にわけて、出版の準備を進めているところです。プロジェクト終了後、いかに調査研究を続けていくのかが、今一番の課題なのです。(長田俊樹)

研究連絡誌『SEEDer』(シーダー) 地球環境情報から考える地球の未来

編集:『SEEDer』編集委員会(編集長 秋道智彌)
発行:昭和堂 定価1,500円+税
第5号 特集 都市をはかる 2011年12月発行



受賞 列島プロジェクト成果本『奄美沖縄環境史資料集成』が「沖縄タイムス出版文化賞・正賞」を受賞

研究プロジェクト「日本列島における人間-自然相互関係の歴史的・文化的検討」(リーダー:湯本貴和教授、2011年3月終了)の成果本『奄美沖縄環境史資料集成』(安遊遊地・当山昌直編 南方新社 2011年3月)が沖縄タイムス出版文化賞・正賞を受賞しました。



この賞は沖縄県内の出版文化の向上と出版活動の振興を図るため、沖縄にかかわる一般刊行物の中から優れた図書に対し表彰されるものです。

プロジェクトの奄美沖縄班メンバーが5年間の研究成果の集大成として、膨大な資料を惜しみなく盛り込み、奄美・沖縄の人と自然の関係について深く知りたい、学びたい人たちへの手引きとなることをめざして編んだ842ページ、厚さ5cmにも及ぶ書籍(DVD付)です。(編集室)

前ページより

開催日	タイトル	主催(プロジェクトリーダー)	開催場所
12月27日	第24回 資源プログラム 地球地域学プログラム 合同研究会 第1回 地球環境学リポトリ研究会	資源領域プログラム 地球地域学プログラム 研究推進戦略センター	地球研講演室
1月10日	(水土地)プロジェクトセミナー「統合的水資源管理(IWRM)の概念—事例から考える IWRMの課題と展開」 「都市における農業用水の維持管理の現状とそのローカル・ガバナンス形成への課題—東京都日野市の『豊田堀之内用水組合』の事例から」	渡邊紹裕	地球研セミナー室
1月10日 -11日	イリプロジェクト国際ワークショップ Toward a Sustainable Society in Central Asia: An Historical Perspective on the Future	窪田順平	Kazakh Economic University(カザフスタン)
1月12日	イリプロジェクト公開シンポジウム Toward a Sustainable Society in Central Asia: Our responsibilities toward Unborn Generations and Unseen People	窪田順平	Kazakh Economic University(カザフスタン)
1月12日	第74回 地球研セミナー Epidemiology of Hypertension and non-communicable diseases in Ladakh; and its relevance to High altitude adaptation and life style changes	地球研	地球研講演室
1月12日	第75回地球研セミナー The determination of permafrost thawing from long-term streamflow measurements:The case of eastern Siberia	地球研	地球研講演室
1月19日	第76回地球研セミナー Transdisciplinarity Discussions on the Future of Global Environmental Change and Sustainability Research	地球研	地球研講演室
1月23日	第14回 EPM勉強会 Negative and non-negative impact of the Dust and Sand Storms (DSS), originated in Mongolia for countries in Northeast Asia	EPM勉強会	地球研セミナー室
1月24日	第25回 資源・地球地域学プログラム合同研究会 「ザンビア南部州における極端気象への適応戦略—レジリエンス理解のために」 「地質学的視点から見た自然災害リスク—神奈川県丹沢山地におけるケーススタディー」	資源領域プログラム 地球地域学プログラム	地球研講演室
1月25日	第5回 基幹研究ワークショップ	基幹研究ハブ	地球研講演室
1月27日	第77回 地球研セミナー「日本の里山・里海の評価とニュー・コモンズについて」	地球研	地球研講演室
1月27日	第2回 未来設計イニシアティブセミナー「マイクロネシアの海面利用と自然保護の工夫」	基幹研究ハブ	地球研セミナー室
1月28日	第78回 地球研セミナー「ベトナムでアブラヤシ栽培が展開しないのはなぜか—ゴム栽培との比較から」 「同床異夢」から「同床同夢」へ:インドネシアのアブラヤシ大農園=小農関係とグローバル経済」	地球研	地球研セミナー室
1月30日	第3回 基幹 FS「東アジア成熟化社会」研究会「東アジア中進国の課題」	佐藤洋一郎	地球研セミナー室
1月31日	第2回 リポトリ研究会「リポトリ」とは何なのか?	研究推進戦略センター	地球研セミナー室
1月31日	長尾 FS半島研究シンポジウム 「過疎高齢化による耕作・森林放棄と生態系劣化との関係—半島域を活用した現状把握と今後の展開」	長尾誠也	地球研講演室



発行 英文ニュースレター
RIHN News

このたび、地球研の新しい研究活動に関するニュースやお知らせを海外の連携機関や研究者により広く伝えるため、英文ニュースレター RIHN News を作成しました。海外の研究者や連携機関が地球研により興味を持たれ、地球研ホームページへアクセスして頂けるような内容で企画・構成しており、年4回アップしていきます。また、そのPDFのリンク先を連携機関へメールでお知らせします。

RIHN News第1号は次のリンクからダウンロードすることができます。

http://www.chikyu.ac.jp/archive/RIHN_News/RIHN_News_01_01.pdf

どうぞ RIHN Newsをプロジェクト活動などにご利用下さい。

* RIHN Newsはホームページまたはリンクからのダウンロードのみでご覧いただけます。紙面による配布はしていません。

募集 平成24年度 総合地球環境学研究所
インキュベーション研究(IS)

●インキュベーション研究とは

今回公募を行なうインキュベーション研究(以下「IS」という)は、地球環境問題の解決に向けた総合的な研究における新たな研究シーズを発掘することを目的として、地球研及び所外の研究者が共同して行なうものです。地球研の研究プロジェクト方式では、ISは半年から1年後に予備研究(連携フェーズビリティ・スタディ:以下「連携FS」という)の候補となり、地球研の所内審査を経て連携FSに進むことが認められます。その後6か月ないし1年の研究を実施し、地球研の所内審査および国内外の評価委員で構成する研究プロジェクト評価委員会によって適切と認められれば、地球研運営会議の承認を経て研究プロジェクトに進展できる段階的な評価を経て行なわれる方式です。なお、今回募集のISは、平成24年10月または平成25年4月から連携FSに進展を、さらに年度末の評価結果により、連携研究プロジェクトへの進展を目標とする共同研究です。

●申請資格

①国、公、私立大学等の教授、准教授、講師および助教

②上記①と同等またはそれ以上の研究能力があると地球研所長が認めた者

●研究期間

平成24年5月～平成25年2月末(平成24年10月に連携FSに進展した場合は、ISはその時点で終了とします)

●所要経費

旅費及び消耗品費等について、予算の範囲内(30～100万円程度)で地球研が負担
ただし、備品(10万円以上)の購入は不可

●応募書類の提出等

- ①提出書類: 申請書等は、下記WEBページよりダウンロードしてください。
- ②提出期限: 平成24年4月3日(火)期限厳守
- ③提出先: 総合地球環境学研究所研究協力課
研究協力係 〒603-8047
京都市北区上賀茂本山457-4

詳しくは地球研ホームページをご覧ください
http://www.chikyu.ac.jp/archive/topics/2012/topics_2012IS.html

●問い合わせ先

管理部研究協力課研究協力係
Tel: 075-707-2148
E-mail: kenkyou@chikyu.ac.jp

編集後記

日本中を激震させた、あの日から丸一年が経過しました。まず、この震災で亡くなった方のご冥福をお祈りしたいと思います。地球研でもいろいろなかたちで、震災復興に取り組んできました。被災地ではさまざまな専門家が専門の見地から相矛盾する意見を出しているなか、地球研が得意とする分野横断的なアプローチは復興の現場でも役にたつのではと感じました。この4月からは新編集委員会の体制でニュースをお届けします。(湯本)

編集委員 ●阿部健一(編集長) / 湯本貴和 / 梅津千恵子 / 源 利文 / 鞍田 崇 / 林 憲吾

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所報「地球研ニュース」
Humanity & Nature Newsletter No.35
ISSN 1880-8956
隔月刊

発行日 2012年2月15日
発行所 総合地球環境学研究所
〒603-8047
京都市北区上賀茂本山457番地の4
電話 075-707-2100(代表)
E-mail newsletter@chikyu.ac.jp
URL <http://www.chikyu.ac.jp>



編集 定期刊行物編集室
発行 研究推進戦略センター(CCPC)

制作協力 京都通信社
デザイン 納富 進

本誌の内容は、地球研のウェブサイトに掲載しています。郵送を希望されない方はお申し出ください。

本誌は再生紙を使用しています。